

# 狭山スカイテラスの計画とデザイン

南條洋雄<sup>1</sup>・海老原竜司<sup>2</sup>・黒島直一<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 非会員 株式会社南條設計室 (〒150-0021 東京都渋谷区恵比寿西 1-33-15 EN 代官山ビル 3F,  
E-mail:h-nanjo@ananjo.co.jp)

<sup>2</sup> 非会員 独立行政法人都市再生機構東日本都市再生本部 (〒163-1313 東京都新宿区西新宿 6-5-1  
アイランドタワー, E-mail:r-ebihara@ur-net.go.jp)

<sup>3</sup> 正会員 大日本コンサルタント株式会社 (〒170-0003 東京都豊島区駒込3-23-1,  
E-mail:kuroshima@ne-con.co.jp)

楽しく歩ける都市の中核拠点として、都市施設の充実、交通結節機能の向上、及び美しい都市景観の創出を目的とした狭山市駅西口の第一種市街地再開発事業である。公募で決まったスカイテラスという愛称の通り、駅前広場から続く緑豊かな市民緑地、広場を取り囲むような建築群の配置、それらを結ぶ軽やかなデッキが、安心安全な生活拠点となり、かつ舞台装置のごとく様々な眺望や活動の場を提供している。特に、駅前広場とそれを取り囲むように入り込んだ建築施設棟レイアウト、市民広場とが一体的に整備した結果、七夕祭りをはじめとしたイベント等にも対応できるのが特徴である。その活動は年々盛んになっており、日常の交通結節の場としても使いやすく、イベント等の場として、憩いの空間として、緩やかに成長を遂げている。本稿では、これらの空間実現に重要な役割を担った計画とデザインについて報告する。

キーワード: 景観整備, 駅前広場, 都市施設, デザイン, 総合設計調整会議

## 1. 計画概要

### (1) 概要

狭山スカイテラスは、狭山市 (人口約 16 万人) にある西武新宿線の狭山市駅西口に位置する駅前広場を中心とした公共施設群である。第一種市街地再開発事業により、駅前広場や都市計画道路等を整備し、駅前の交通環境の改善を図るとともに、狭山市の中核拠点として魅力ある景観を備えた、安全で快適な賑わいのある中心市街地を形成するため、良好な居住環境の都市型住宅を供給とあわせ、商業及びコミュニティ・文化・行政等の生活拠点施設の整備を行っている。

狭山市駅西口地区の整備は市の最重点施策であり、市街地再開発事業を“要”として「狭山市の表玄関の“顔”である中核拠点にふさわしい、魅力ある空間を備えた、安全で賑わいのある市街地の形成を図る」という目標を定め、整備が進められた。

### (2) 背景、課題

事業の背景、計画の課題のうち、代表的なものは下記の3点である。

#### 【背景：都市機能の低下】

当地区は、道路や駅前広場が狭小で、混雑時は人と車が輻輳する為、大変危険な状況にあった(図-1, 2)。また、木造家屋の密集による防災上の課題や土地の有効な利用が図られていないといった課題を抱えていた。



図-1 整備前の駅前広場の様子



図-2 整備前の駅前広場に向かう道路の様子 (整備後の市民広場の位置にほぼ同じ)



図-3 全体平面図

【課題①：目標像の設定】

東京から小一時間の狭山市駅西口の駅前空間がどうあるべきか、この命題が市民の関心事であり、所沢ほか西武沿線に見られる大規模施設依存の駅前再開発を目指すのか否か、「狭山＝お茶」などの既成概念からの脱却をどう図るか、が課題となっていた。

【課題②：良質な都市空間整備を実現する体制】

都市空間の整備では土木・建築を中心とした様々な環境デザインの領域にまたがる取り組みが不可欠であるが、また企画段階から施工段階迄、多くの専門家や関係者の参加が必要となる。通常は設計、施工共一貫性を欠き、一体的な空間整備に至らないケースも多い。

## 2. 計画

### (1) 市民と共に考えたコンセプト

狭山市、URが中心となり市民公開講座による勉強会や意見収集の場、および事業者や設計者らによる実態調査が進められた。幾重の議論の末、当時主流であった商

業施設を駅中心に据えるのではなく、秩父の山並みを正面に見る景観を新しい駅西口の顔とすることが方向付けされた(図-4)。また、狭山らしさの三要素を「緑・坂・眺」に整理し、合わせて自然を謳歌する狭山と自動車産業など先端科学を得意とする狭山という二つの顔も整理した。後に、建築やデッキはシャープな造形をめざし、広場や道路などはオーガニックな線形や高低差を活かした造成と緑の積極的導入につながっている。



図-4 駅前広場デッキから広場を眺める。遠方に秩父連山を望む景色は、建築施設の分棟により実現している。

## (2) 設計者、デザイナーの統合、施工までの関与を実現した会議体の施行

事業者は、良好な都市空間実現に向けて、土木・建築・造園といった設計者が個々に有能であるだけでなく、その総合力こそが重要と捉えた。平成16年に始まる各分野の基本設計時に総合設計調整会議を組織し、座長（マスターアーキテクト）として南條洋雄氏が招聘される。ここが狭山スカイテラスのデザインに大きく影響している。各分野の設計者が会議構成員だったが、建築については技術競争（デザイン提案の公募型プロポーザル）、その他の分野は一般競争入札で調達されている。会議は詳細設計までの2年間、分野を跨ぐ施設の調整を主な議題として継続的に開催された。

設計の意図は施工者に的確に伝達するために、会議体は継続された。施工に伝達する現地での設計監理にむけて、筆者らがプロデューサーとなり、色彩調整会議という組織を形成して、デザイン実現にむけて設計者と施工者が協力して行う体制を構築した。これにより計画から設計施工まで一貫したデザインコンセプトを保ったまま完成に至った。

## 3. デザイン

### (1) 全体デザイン

駅前広場から続く緑豊かな市民緑地、広場を取り囲むような建築群の配置、それらを結ぶ軽やかなデッキが、安心安全な生活拠点となり、かつ舞台装置のごとく様々な眺望や活動の場を提供している。特に、駅前広場とそれを取り囲むように入りした建築施設棟レイアウト、市民広場とが一体的に整備した結果、七夕祭りをはじめとしたイベント等にも対応できるのが特徴である。

約12mある高低差を、敷地全体で活用して緩やかに解消し、全ての通路を5%以下の縦断勾配とした有機的で、折り返しなどせず自然と調和した柔かい動線、種々の基準や条例に適合しつつ、ゆとりある歩行者移動空間、四季折々の緑が、人々の眼と心に安らぎを与える日常への優しさ、などが主なデザイン成果である(図-5)。



図-5 緩やかに弧を描き緑を感じ高低差を解消する市民広場

## (2) 総合設計調整会議による成果

総合設計調整会議で最も大切にされたことは、利用者目線である。すなわち、各管理区分（土木・建築・造園）にこだわらない適切な動線、施設配置である。したがって、管理区分線をまたぐ施設について、熱心に議論と調整を行った。前述した高低差解消計画、舗装デザイン、色彩計画、サイン、照明などにその成果は表れている。代表的なものとしては駅前広場のバス待合の空間確保(図-6)、デッキ下の建築敷地と公園敷地にまたがった半公共空間(図-7)、180度の折り返しを回避した斜路などである。基本設計の与条件として与えられた平面図から、細かい改良を積み重ね、今の空間が実現している。



図-6 駅前広場のバス待合の様子。バス待合は乗降部に準備したシェルター下のベンチに加え、木陰が準備された石の腰壁にたたずみながらバスや人との待ち合わせることができる。設計で与えられた道路区域は整形であるが、隣接する広場と一体的にデザインすることで、自然で豊かな待合空間を提供することができる。



図-7 住宅棟ゲート付近から張り出した半公共のテラスの様子。普段は居住者の親子連れやお年寄りの憩いの場となっている。テラス下の階段踊り場に少し張り出し、互いに適切な広さがとれている。デッキ橋脚をテラスに取り込み、庇のような役割を兼ねている。

### (3) 市民をはじめとする利用者の生活文化の創造

これまでの危険と常に隣り合わせの駅前広場は、単なる交通機能の場ではなく、憩い、安らぎ、楽しみ、喜びが得られる広場に転換した(図-8)。通勤通学にはキスアンドライド、公共駐車場駐輪場が新しいライフスタイルを市民に提供している。そして、駅前広場を中央に、それを取り囲むように入りした建築施設棟レイアウトが舞台空間のごとくイベント等に対応できる新しい公共空間、単一機能の寄せ集めでない複合させた公共施設棟、緑豊かな空間などが一体となって市民参加による文化活動を誘発するストーリーである。



図-8 市民広場がイベントに活用された様子。広幅員の両側にテントを据えて賑わっている。車いすや乳母車に親切的な斜路は、健常者にも快適な動線となる。

### 4. 美観維持の取り組み

維持管理についても、水まきや除草などのきめ細かい管理により、緑の生育状況が良好であり、清掃用に設計施工された設備などにより、建築棟やデッキ等屋内外施設の清掃も行き届いている(図-9)。継続的な維持管理により、落書きやイタズラなどの景観悪化行為は散見されない。それらが渾然一体となって生まれる舞台的活動の場がまちの元気を持続させている。



図-9 デッキ地覆部に設置した清掃用水道栓

「さやまルシェ」という地域ポータルサイトを狭山市と民間企業が官民協働事業として企画・運営を開始。様々な情報発信を行いながら、魅力の維持にも精力的である (<http://savama-portal.jp/>)。

### 5. 今後の展開

広場においては、地域のメインイベントである「七夕祭り」(図-10)をはじめ、各種イベントのさらなる広場活用が期待されている。市民広場に配置された天の川演出照明について、将来的には市民(地元高校生など)から演出方法案を募るなど、地域が徐々に主体となった活用がはじまりつつある。



図-10 地域最大のイベントである七夕祭りの様子。狭隘な従前の駅前広場の時には、このような華やかな空間は数百メートル離れた商店街を中心に展開されていたが、今回整備を契機に駅から商店街までが賑わい空間となる。

### 6. おわりに

多様なデザイン領域(土木・建築・造園・サイン・色彩・照明など)が一体となってデザインを行った統合活動そのものが文化的活動であり、新しいまちづくり手法の1つのモデルを示せたと筆者は考える。

良質な公共空間の創出には、その関係者個々の能力に加え、デザインについて統括能力のあるデザイナーの従事が必要と考える。競争入札等従来型の設計者や施工者の調達でも、都市景観大賞、グッドデザイン賞で一定水準の第三者評価を頂ける都市空間を創造できることを本事例は示したと考える。

土木、建築、造園といった分野を超えてリーダーシップの図れる人材が活躍できる場が増えるべきと考える。景観・デザイン分野の人材もその役割を担える分野であり、ますますの活躍の場が増えることを期待し、本稿の報告を終える。